

平成京創成

21世紀 京都グランド・デザインへの提言

別冊——概要

平成7年12月

社団法人 京都経済同友会
21世紀・京都プロジェクト

平成京創成

21世紀 京都グランド・デザインへの提言

目 次

概 要——提言[平成京創成].....	2
---------------------	---

はじめに	〈提言の趣旨〉..... 2
Ⅰ. 理念 コンセプト	〈地球からの発想〉..... 2
Ⅱ. 状況 シチュエーション	〈風土と社会の活動〉..... 3
Ⅲ. 課題 サブジェクト	〈ファンタジー〉..... 4
Ⅳ. 目標 ビジョン	〈学術・文化都市 京都〉..... 5
Ⅴ. 地域 ゾーニング	〈グレーター京都〉..... 6
Ⅵ. 基盤 インフラストラクチャ	〈ライフライン〉..... 6
Ⅶ. 機能 システム	〈お祭りの仕組みと仕掛け〉..... 7
Ⅷ. 実行 プログラム	〈地域からの行動〉..... 9
Ⅸ. おわりに	〈これからの展開〉..... 10

はじめに

〈提言の趣旨〉

京都経済同友会は、この提言をもって“市民の力で創るグランド・デザイン”づくりに参加するものである。本会は平成5年9月に発表した『“平成京の創成”——京都の都市景観に関する第2次提言』で、(1)人—市民が主役の都市づくり、(2)自然と文化の特性を活かす都市づくり、を理念とし“京都・百年の計へ”向けて、①「京都策」の精神から学ぶ、②100年持ちこたえられる都市づくりと都市景観、③市民の力で創る平成京、④リーダーの指導力、の四つの課題を示した。

我々は、グランド・デザインとは、空想画や極楽絵を描くことでも未来を占うことでもなく、現在に生きる世代が、都市・京都の進むべき誤りなき道を求めることであると考えている。それは、自らの人生と重なってつくられて行くのであるから、我々、現代に生きる市民の“夢”を表し、それへ向けての我々自身の生き方、考え方、行動の指針、即ち、“ガイド・ライン”である。我々は、次の世代が、その時代になってこれを評価し、その時代としての自らの進むべき道を探究されることを期待する。

I. 理念 コンセプト

〈地球からの発想〉

人類は、地球に生かされている存在である。人類は地球上の各地に散らばって進化の道を歩み出した時、地球のシステムを理解するための“科学”と、人類自身を理解するための“哲学”が必要になった。しかし、科学の未熟と哲学の対立は、システムを乱したり、人間同士の争いを起こし、しばしば人類自身の生存を危くする事態を招いた。近代日本へ脱皮した明治以後、まだ僅かに120余年の間での度々の“揺れ”は、日本人が目覚ましいと思い込んでいた経済的・物質的成功とは裏腹に、哲学と科学的思考の未熟さへの反省を迫った。20世紀末、人類史の変曲点通過の過程で、西欧文明の価値観の優位性が揺ぎ、東洋の精神性が浮上したが、またまた不合理・非合理から反合理にまで振れ、西の心と東の心、科学と哲学をいかに統一するかが求められた。

国土の中心的な都市であり続けてきた京都は、“異文化”の刺激を受け入れ、凝縮・洗練し、“地方”へ伝播してきた。京都は、人類史的・時間的視点と、地球的・空間的視野に立って、変革を続ける時代の最先端を考えることができる立場にある。

優れたバランス感覚と不屈のバイタリティをもっての変革・刷新こそが京都の、古くて新しい“アイデンティティ”である。

グランド・デザイン「平成京創成」の哲学的基礎は、大自然への畏敬と、祖先への感謝の念、即ち、宇宙の摂理と人間の理想にあり、基本姿勢は“変革”である。

Ⅱ. 情況 シチュエーション

〈風土と社会の活動〉

1. 基礎 ファウンデーション

(1) 山河襟帯の風土

京都は平安の名に関わらず、災難の都市でもあった。次の100年間、地理的位置は変わらないが、人間に甚大な災害をもたらす変動が、起こらないという保証はない。

京都は、山紫水明の形容にかかわらず、必ずしも美しい都市ではなかった。衰退と荒廃も経験してきた。しかし、荒廃から立ち上がり、都市を美しくしようとする意志や努力が強く支配してきた都市である。その美しさの基準は“四季”を基調とする日本固有の文化を代表する“花鳥風月”型である。1200年にわたって蓄積された人間の思いが浸透している“風土”は継承される。

(2) 歴史都市の蓄積

山背の地は、4～5世紀頃から、渡来氏族による進んだ土木技術によって支えられた農耕生産と、優れた手工芸が発達していたが、延暦13年(794年)平安京創建は、最初の一大転機となった。以後、1000余年間、日本の首都となり、常に時代をリードする役割を担い、それが様々な型での都市の中に蓄積されている。

2. 位置 ポジション

(1) 日本と近畿

京都は日本の首都ではあったが、地球的視野で見ると、世界に覇をとる、大帝国の首都ではないし、永く日本の文化的中心ではあったが、人類の文明に重大な影響を与えるほどのインパクトを発していたとは言えない。中国と韓半島からの影響を受け、また西欧からの情報が入る位置にあって、それらを包み込み、東アジアでも独特の日本文化へ熟成させる中枢にあった。近代では東京・大阪をはじめ、日本の“地方”が発達し、こんにち日本の中の、近畿大都市圏の一角を担う位置にある。

(2) 次の時代の予兆

京都の現市域における人口は、過去100年のように増えることはないが、その構造は変わる。20世紀末に既に予兆しているが、1200年のサイクルの中で、遣唐使廃止後の王朝時代に匹敵する“女性の時代”に入ると予測される。外からの強烈な男性的インパクトに強靱に耐え、柔軟に闘い、次の日本文化熟成の中枢となる位置にある。

Ⅲ. 課題 サブジェクト

〈ファンタジー〉

1. 世紀末の都市・京都

(1) 歴史都市の課題

京都は、歴史が古いが故に、複雑な権利関係、市民の高齢化など市民自身がつくったシガラミも背負っている。京都は都市としてはもはや、衰退の過程にあるのか。元気旺盛な大都市と比べて、歴史性はネガティブな要因であろうか。

行政や経済システムがつくった制約もある。京都の産業と社会構造は、市場経済の渦中に曝されると抵抗がない。全国一律の法制度や資産評価の仕方は、伝統的な木造文化や小さな情緒に無慈悲であり、都市の財政運営は厳しい。国の制度を変えるか、京都の産業や社会や空間のあり方を変えるのか、どちらが第一義的課題であろうか。

(2) 都市の内発力

京都は20世紀の100年間に、人口147万人の大都市になり、大学など高度な機能も数多く持った。しかし、そのために行政需要から合意形成まで、大変な精力と財力を要する。この大きさ・多さをポジティブなパワーに転化することが出来るであろうか。

2. パラダイムの転換

(1) 変革への胎動

我が国は、物質的豊かさを手にした筈であるが、これで良かったのかと、疑問が不安に、苛立ちとなり、変革を望みはじめた。モノよりココロ、精神性へ“パラダイムの転換”と言われている。世の中は、新しい様相を呈してきている。地方分権や地域自治が、国際性やグローバル化が、地球環境やエネルギーの問題が浮上している。

21世紀への課題は、①市民大衆の人権・福祉・安全、②諸民族との平和・友好、③地球に馴染む生産構造への科学・技術開発であろう。

(2) 変革を導くファンタジー

変革とは夢の達成である。20世紀、民主主義社会の夢と冒険が現れた。貴族や大名の真似ではなく、遊びは科学技術と結合して“夢”が生産される。変革を促す究極の要因は、強烈なファンタジーである。バーチャル・リアリティが成熟し、ビジネスと市民生活にまで浸透して行くが、“地球から発想”し、“四季の京都”が媒介して、ファンタジーの日本的表現を創造することが最大の課題であろう。

IV. 目標 ビジョン

〈学術・文化都市 京都〉

1. 都市・京都の性格

(図－1「都市・京都の基幹的性格と人口規模」本編P.12参照)

(1) 文化都市

21世紀の都市・京都の、基幹的な性格は「学術・文化都市」である。過去からの連続的線上に未来があるが、幾つかの転機がある。京都は、幾度も基幹的な性格を変えその回りに従来の機能が重層的に積み重なり、伝統的な文化を展開してきた。

西欧と東洋の大きな交流に、伝統的な批評と洗練のシステムを活かし、凝縮・熟成を重ねて、21世紀型日本文化を開花させる。京都はその拠点・日本の文化首都である。

(2) 学術都市

「学術・文化都市」とは“学術と文化”、“学術の文化”の複合である。

既に江戸末期に独自に成熟した産業を土台に、庶民の間にまで学問が普及し、新しい科学・技術を吸収して殖産興業の先導的役割を務め、学術研究と人材教育の拠点となったが、それは伝統的な精神文化と結び、同じく伝統的な開放性・国際性を活かし、高度な学術都市となる。それは、企業の本社機能や研究開発拠点を吸引する。

2. 都市・京都の形と心

(1) 環境と表現

地球環境の危機は、省エネルギーや再生・分解可能な資材等、エコ・システムへの試行段階から、21世紀の京都は、ビオトープ（動植物の生息空間）の都市へ先端を進む。山河襟帯の地形、四季豊かな気候条件を活かし、三方の山から都市の奥深くまで、花と緑がなだれ込み、インフラから道具・資材に到るまで、自然との共生を実現する都市とする。木の文化が再生し、象徴となる門や塔、超高層建築までも、木で造られる。更に、研究機関や保健所等のソフト・システムも、そのために機能する。

(2) 生活と社会

京都は、永い都市的生活の中で、倫理的ガイドラインによって、様々な活動が人間の本性に合うものかどうか、チェックし、持続してきた。これからは、人と物が、科学・技術、感性・知性を伴って、世界中から来る。こうしたインパクトと上手に対話し、評価し、組み込んで行く伝統的なシステムをバージョン・アップして、学術・文化の働きによって、前のものづくり文化を継ぎ、次の観光・サービス文化も準備する。

V. 地域ゾーニング

〈グレーター京都〉

1. グレーター京都

(1) 京都都市圏

21世紀、山城の地域は、平安京創建以来の一大転機を迎える。南部の関西文化学術研究都市のクラスター群を含むひとまわり大きな構えの大都市圏を形成する。保存的開発の方法で、巨椋池地域と綴喜・相楽の条里が、格子型と軸の構造で整備される。

(2) ビオトープ都市

(図-2「花と緑と水のゾーニング」本編P.14参照)

山河襟帯の原地形の上に、絢爛たる錦織のように織りなす“花と緑”はゾーニングの下地である。花と緑は空間的に彩るだけでなく、時間的に即ち、四季を表現する。

重層的に継承されている各時代の文化が、ローカル・コンセプトを成し、洛中・洛外に曼荼羅のように、個性と暮らしの息吹があふれる地域群をつくる。

(3) 都市軸と拠点

(図-3「土地利用の概念」本編P.15参照)

平安京城の格子型構造は、南部の南山城地域にも継承され、南部地域で、東西方向の国土軸と結ぶ。南北方向に「軸状都心」が形成される。この都心軸には、洛中・洛外の地域拠点を結ぶ様々な機能の核が内包され、高層化する部分もつくられる。

2. コミュニティ・京都

(1) 職住一体

市民の生き生きした暮らしの息吹がないところに、魅力はない。“まちづくり協議会”を原形に、自主・自律の自治能力を持ったコミュニティの連合が都市を形成する。

(2) 機能分担

現市域を越えた多様・多彩なコミュニティの連合体が、グレーター京都である。

各コミュニティは、プロダクト・ゾーン、アカデミック・ゾーン、ショッピング・ゾーン、エンターテインメント・ゾーン等々の広域的機能を受け持つ。

VI. 基盤インフラストラクチャ

〈ライフライン〉

1. 交通

簡便なEVカーが急速に進歩し、私鉄・地下鉄の乗り継ぎやターミナルも都市の楽しみ装置になる。都心部の歩行者天国や、JR東海道線の高架化、洛中・洛外を結ぶ環状線は、25年以内に実現する。道路は花と緑を結ぶ小さなインフラとする。

2. 物流

便利なサービスは、無駄な輸送交通も増やし、合理化追求は、非常時に弱いシステムにした。時間的・空間的なルールを組み直し、ターミナルやデポジットセンターからパーキングまで、他の機能と併せて、面白い装置にしてしまう。

3. 情報・通信

情報・通信は文化を創る手段であるが、伝統的な“小さな情緒”の魅力を尊重し、パーソナル・コミュニケーションを基本に、マルチ・メディアも活かして、新しい情報文化の都市にできないだろうか。

4. エネルギー

エネルギーも合理化・集約化を追求してきたが、それが目指した利便・安価・安全は達成されようか、21世紀への夢は、ソーラー・エネルギーをはじめ、自然エネルギーの満ちあふれた、エコ・シティ京都である。

5. 拠点型施設

既に、20世紀に造られた施設群を市民生活・産業振興の視点から位置付け、これから、シティホール、コミュニティ・センター、備蓄基地、ヘリポート、南部大公園、アミューズメント、図書館・博物館ネットワーク等々の整備優先順位を定める。

6. 地下ライフライン

地下はもう一つのフロンティアである。企業経済の成長と、バランスして高度化する市民生活のための公共投資も強化する。共同溝・地下鉄・地下道路は、都市装置へ進化する。先ず、交通・通信・エネルギー・給排水など、ライフラインの機能を収容し、都市の安全を確保する。次に、物資とエネルギーの備蓄センター・都市の保守管理センターから物流ラインの機能へ展開し、コミュニティのデポジットセンターまでネットワークする。その次には、全ての拠点施設が、地下でもネットワークされる。

VII. 機能 システム

〈お祭りの仕組みと仕掛け〉

1. お祭り都市・京都

(1) コーディネート機能

お祭りのソフト・ハードに学び、中心となる格調高い学術・文化を尊重し、古代ロマンの復元や、先端技術を駆使した演出、創造的な土産物などをもって、回りにアトラクティブな仕掛けをつくり、これらを回転させるプロデュース・コーディネート機能を育成し、ファンタジーの世界を演出する。変革を起こす人間と装置こそ京都の基幹的機能である。

(2) NGO／NPOの展開

21世紀の資本主義における経済社会の統合原理は「参加」である。

NGOは徹底的にニーズに応える、つまり市場オリエンテッドであり、自主的参加である。NGOは、公営・公共には市民サービスの精神を、私企業には公正な競争の精神を叩き込み、システム変革の鍵となる。

2. インキュベート・センター

(1) シンクタンク・システム

変革をつくり出すのは人である。ベンチャーとともに、人材育成そのものまで、起動するインキュベーターが求められる。シンクタンクは、市民に身近な学区から行政区・全市と基本型ネットワークと、商業・安全など専門型ネットワークで構成される。

学術・文化都市・京都は、一大インキュベート・センターとなるであろう。

(2) コミュニケーション・システム

コンセンサスとセキュリティのために、情報システムを根本的に刷新する。麻薬・カルトから火災・震災など、社会不安の要因は、国際的に繋がり、益々複雑になり、急速に変化する。安全は国レベルだけでなく、府県・市町村から地域コミュニティまで、ネットワークしてこそ役に立ち、強靱な防衛力を持つことができる。

広報手段は、CATV、ミニ・FMからパーソナルまで、情報インフラとして構築されねばならない。町内会・地域協議会など、フェイス・ツー・フェイスのコミュニケーションを盛んにする。都心のインフォメーション・センターから、地域の集会場まで、多機能の施設がネットワークする。

3. エンターテイメント都市

(1) コミュニティ・リゾート

京都は、全国・全世界に向けては、一大観光都市である。同時に、京都は市民の生活の都市であって、観光やリゾートも、市民の楽しみや憩いと重層している。

観光行動は、受け身型から創造型まで多様化し、観光地や観光施設側のコンセプトも重層化する。ディスカバー型の観光が、市民生活の中まで侵入してくる場合もある。

家族連れの大遠足からスポーツ大会まで、市民の余暇活動は多様に展開している。

明治の京都は、円山公園や新京極や都をどりなど、楽しみの大衆化に応える仕組みや仕掛けを創造した。そして、100余年、京都の観光地は、お上りさんと市民の遊びが重なりあって発展してきた。

市民には日常的に濃厚サービスを必要としない。手近で、低価格で利用できるスポーツ施設やお風呂のある休養施設もあってよい。それは、コミュニティの余暇センターである。即ち、コミュニティ・リゾートが充実する。

(2) アート・ギャラリー

京都は世界のアーティスト、エンターティナーの舞台となる。彼らは京都から世界へ発信する。市民も余暇時間の増大とともに、世界との交流が進み、余暇活動は多様化とともに、高い水準の、多様な活動がリードする。

絵画・彫刻・陶芸・書道等々のアートの分野、演劇・音楽・バレエ・オペラ等々の舞台芸術の分野で、広い裾野を持つ活動に応じて、美術館や劇場のニーズが高まる。

京都は、全域がアート・ギャラリーであり、響き合う都市となる。

(3) ミュージアム・システム

世界歴史都市博物館は、京都のミュージアム群のセンター機能を受け持つ。それは現市庁舎を改修・増築してつくられる。ミュージアム群の端末は、学区ごとに出来るコミュニティ・センターに図書館の分館などとともにある。図書館は映像・音響の資料も含まれる。図書館の他、近代美術館・自然博物館・演劇博物館・フィルム博物館など専門博物館が、オペラハウスや映画・演劇大学などに付属してつくられ、コンピューター・ネットワークで結ばれる。

ミュージアム・システムは、子供達に夢を提供する。

VIII. 実行 プログラム

〈地域からの行動〉

1. パラダイムの転換

(1) グランド・デザインへの期待

様々なプロジェクトも行政施策と市民の夢や願望とが擦れ違い、不満から苛立ちへ閉塞状態に陥入り、歪みと暴発が起こっているのが20世紀末の社会状況である。

(2) “青い鳥”はどこにいるか

過去にも人類は満ち足りた時、もっとダイナミックで、刺激的なものを求め、中毒症状に陥った。しかし、人類は、地球がつくる自然の営みにはかなわないのである。

(3) 双方向の思考

京都は、バランス感覚の発達している町である。昔から、トップダウンとボトムアップの双方向が大事だと考えてきた。そこに、前向きへ動かして行く秘密がある。

2. モチベーション

(1) 繋ぎの環は何か

壮大な“夢”を求めることと、現実の苛立ちから脱する行動指針を求めることと、これを繋ぎ、うまく回転運動へ持って行く“環”は何だろうか。

(2) 遺伝子に“青い鳥”が

“青い鳥”は、身近な所にいる。市民の心の中にある思い——モチベーション（動機・欲求）である。それは“遺伝子”のように、祖先から受け継いでいるのである。

(3) “プラス思考”で自己実現

既に物質的豊かさは基本的に達成した。未だ残る格差を解消し、全ての市民が「ヤッタ！」と言える人生の実現を目指すのが、「21世紀 京都グランド・デザイン」である。

3. まちづくり協議会の仕事

(1) 22世紀へ遺産を守る

夢とロマンは、歴史の中にもある。先ず、遺産を守り、調査・保存し、地域のアイデンティティとし、都市の魅力を高める。

(2) 新・旧の文化を繋ぐ

古いものと繋ぎ、創造を刺激し、都市の活力と魅力を高める。広報宣伝は繋ぎに大きな役割を果たす。

(3) 触媒となる新機能・施設をつくる

市民のモチベーションを組織する運動から起動する。さしあたり情報センターや大学センター、起業家スクール等々が拠点になるであろう。

4. ボランティア精神で変革を

(1) 連帯と協同

20世紀末、世界は分裂と対立の巷にある。同じ京都人ではないかと言った時、大阪や神戸とは違うと言っていることになる。同じ関西人ではないか、同じ日本人ではないか、同じアジア人ではないか、同じ人間ではないか、そして同じ地球に生かされている仲間として、生きとし生けるものを慈しむ心、即ち“地球からの発想”に立つ連帯と協同こそ、21世紀の主題である。

(2) 参加社会

21世紀の経済社会の統合原理は「参加」であると言った。或る権力・財力をもった個人による一方的な意思決定に代わって、討論と投票による多数が広く意思決定に参加する。それには、時間がかかるし、決定の如何によって、発展や停滞が不均等に起こることもありうる。

(3) 奉仕と信頼

動機にも不純なもの、エゴから発しているものもあるが、モチベーションを見抜くのは簡単である。市民は“普段の行い”で感じとり、見極めてきた。隣人愛は人類愛へ繋がるように、地域での没我の奉仕から、信頼が生まれ、都市づくりへの連帯の環が繋がってゆく。

IX. おわりに

〈これからの展開〉

1. グランド・デザインへ

〔鏡に映して見る〕 この研究で委員会の討議と並行し、ワーキンググループによる各地の事例の調査・研究を行った。京都を事例という鏡に映して見て考えたわけである。その中の地域で或いは行政と市民の間に何ごとが起こっているかを見た。

水郷・柳川の堀は、昭和40年代の初めには、汚いドブ川のようになっていたが、一人の市職員の郷土を愛する行動が、運動となって美しく蘇っていったことを見た。

近江の八幡堀や小樽の運河にも、同じような例を見ることができる。

長崎の路面電車は、100円で頑張りとおし、市民にも観光客にも安くて重宝な足となって感謝されている。従業員は誇りを持って働き、まちを走るドライバーも敬意を払って、ラッシュ時といえども、絶対に軌道敷内に入り込まない。

大震災で壊滅した神戸の小さな商店街は、電気が通じてすぐに店を開いた。壊れた店の前にシートを張り、全員で通りをきれいに掃除し、お客さんに気持ちよく来て頂こうと、貴重な水を打って迎えた。そして、お客さんの笑顔に元気付けられた。

〔我がまちのビジョンは〕“鏡”は京都の中にもある。西陣で、伏見で、或いは商店街や町内会で、ドブ掃除から建築協定まで、行動は起こっている。身近の“青い鳥”や、“宝物”を見つけ、磨きをかける行動から、我がまちのビジョンが見えてくるだろう。

2. “活性化”への原理・原則がある

〔その始まり〕 小さくとも、良いと思ったことを実行する職員や経営者の行動が、市民の心の中にある良識——GOOD-Willと言う遺伝子と呼び覚まし、郷土愛という連帯のエネルギーに点火される。そうすると遼原の炎となって燃え上がり、反応に相乗効果が起こり出し“活性化”となる。

〔挫折・停滞〕 しかし、楽観論で済ませるものではない。こうした行動は、必ずしも抵抗もなく、平坦な道を行けるものではない。時には、住民の中から「行政にやってもらえばよい」とそっぽ向かれたり、行政や議会側から「余計なことを言う」と面倒がられたり、無視されたりし、挫折感に陥ることもある。

〔利益・報酬〕 また、良いことをしても、必ずしも物質的・金銭的に報われるとは限らない。むしろ、なりふり構わず、振る舞った方が、利益を得て恵まれるのがこの世の常でもある。しかし、一時的に羽振りがよくなっても、永い眼でみるとどうなるか、歴史の評価を見てきた京都人は知っている。

〔本性に根差す〕 より心地よくしよう、より良くしよう、より美しくしようという気持ちは、人類が人類となった時から持っている本性である。まさに人間本来のモチベーション——動機・欲求であって、遺伝子に組み込まれている。

遺伝子と呼び醒ますアピールは、心からの共感と呼び、連帯行動の輪になる。

3. 変革へのリーダーシップと学術の役割

〔リーダーの資質〕 夢を現実にして行く上で市民が選ぶリーダーの役割は大きい。市民のモチベーションに根差して、立法と執行、および執行のチェックが、働くかどうか、決定的な意義を持つ。議員と首長の責務は、先ず市民のモチベーションを感じ取り、見抜く感覚から始まる。

時として不純な動機やエゴもある。市民の声に耳を傾け、耳が痛い批判も聞くことによって、見極める鑑識眼が確かになる。

〔触媒と検証〕 議会と首長をサポートし、市民との間で触媒の役割を担う機能がある。都市景観に関する提言で、明治の“京都策の精神に学ぶ”ことから得たことであるが、呼び醒まされた遺伝子が確信をもち、変革へのエネルギーにして行く過程で、科学・理論が大きな役割を持つ。

〔学術と実務〕 科学・理論は、自然科学や技術だけではない。社会科学・人文科学の広い範囲におよぶ。精神科学に負う理論は益々重要になる。

そこで学術・文化都市・京都は、極めて恵まれた条件を持っている。学問と宗教が21世紀の京都で、基幹的役割を果たす所以である。

京都は、議会と首長、市民と議会・首長、それらと学問・宗教を繋ぎ、支える事務局機能、即ち、公務員から団体事務局まで、経験豊かで優れた人材を持っているし、これから益々その育成に努めねばならない。

〔地域から行動〕 魁より始めよ！ 京都経済同友会の全ての会員が、実践行動を起こし、実践に基づいて批評して頂くことを期待する。そして、次年度以降において、さらに研究を重ね、提言『平成京創成』パートⅡを出して頂くようお願いするものである。